

# On Tadatsubone ni Tsubone Tatete in Makuranos?shi

|       |                                                                                             |
|-------|---------------------------------------------------------------------------------------------|
| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2017-10-03<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者:<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="http://hdl.handle.net/2297/379">http://hdl.handle.net/2297/379</a>                 |

# 「只局に局たて、」考

## ―枕草子「正月に寺にこもりたるは」段―

近藤 明

On "Tadatsubone ni Tsubone Tatete" in "Makurano Soshi"

Akira KONDO

### 一 はじめに

枕草子の「正月に寺にこもりたるは」で始まる段において、小法師らが屏風や畳を使って局（仮設の小部屋）を作っていく場面を、三卷本一類の伝本では

①小法師ばらの、持ちありくべうもあらぬ、おに屏風のたかきをいとよく進退して、畳などをうち置くと見れば只局に局たて、大防に簾さら／＼と打かくる、いみじうしつきたり。や  
すげなり。  
（『校本枕草子』一二四段<sup>②</sup>）

と描写している（右の引用は陽明文庫本に基づく）。傍線部は、三卷本二類では「つばねにたて、」、能因本では「たゞつばねにいで、」、前田本「つばねにつばねにたて、」、堺本「たゞつばねにたて、」と本文異同が著しい。これらの箇所については

A 本文のいずれをより古態に近いものと見るか。

B 傍線部の意味をどう解釈するか。

C 傍線部の構成をどのようなものと把握し、どう品詞分解するか。

といったことが問題になる。この中でAの点についての立場がはっきりしないと、B・Cの点についての考察が進めにくい。当面、三卷本の中でも純粹と言われる（無論、一般論としてかつ相対的にそうではあっても、これを絶対視してかかるのは危険であるが）一類本の本文を軸にして考えていき、B・Cについての考察の過程の中で適宜Aの問題にも言及し、それを踏まえて最後にAの問題についても一度まとめることにしたい。

なお本稿の論旨のうちBの点については、拙稿「『強調』の「動詞二十動詞」型—— $\phi$ 型と「タテ」「イヤ」——」（『語源探求4』明治書院 一九九四。以下「拙稿（一）」）、Cの点については拙稿「『動詞二十動詞』型における動詞の重複範囲——『ひたぎりにきりおとす』『ただあしにあしうなる』等——」（『国語語彙史の研究十三』和泉書院 一九九三。以下「拙稿（二）」）に基づく部分が多く、必要に応じて参照されたい。

### 二 「只局に」の解釈

三卷本一類の本文「只局に」を、「ただくひにくふ」のような

「タダ——ニ——」という型の表現の一種として捉える立場を筆者はとりたいが、ここで次の点を確認しておきたい。

○「タダ——ニ——」の類は、「ただくひに、くふ」のように分析すべきもので、「タダ」は接頭辞的に「——」の部分に接続し、「ただくひに、くふ」というように、「タダ——ニ」が「——ニ」型の状態副詞のごとき資格で「——」の部分に係っていつているとする見解を採る。

○「ただ くひにくふ」というように、「ただ」が副詞として「——ニ——」に係るとする見方は不適当と判断し、採らない。

これらは既に関谷浩氏によって、アクセント・連濁・修飾語句介在の可否等の点を根拠として主張されていることであるが、従うべき見解だと考える。殊に、「タダ——ニ——」の類と、「タダ」を伴わない「くひにくふ」の類は、意味が微妙に異なるので、解釈について論じるに当たっては、この点をはっきりさせておく必要がある。

右のような「タダ——ニ——」の意味については、拙稿(一)でも論じたが、「——」の部分に來る動詞の種類によって異なるところはあるものの、

動作・変化の一連の過程が、遅滞・中断といった時間的隔たりなしに、開始・進行・進展し、完結する。

という点で共通性を有すると筆者は考えている。また、「——」の部分で動詞が繰り返されることによって(詠嘆や驚嘆をこめた)一種の強調的表現となっているものと見られる。

更に「——」の部分に來る動詞が、対象物を加工・製作したり設置したりするような、対象に変化を及ぼす動きを表す他動詞である場合には

対象物の変化やその対象物に変化をもたらす動作主体の動き

が、遅滞・中断なく開始・進行・進展し、完結する。

といった状況を強調的に表すことになるものと考えられる。

②おもしろき萩蕨などを植ゑて見る程に、長櫃持たる者、鋤などひきさげて、只ほりにほりて往ぬるこそわびしうねたけれ。

(中略) いみじう制すれども「只すこし」などうちいひて往ぬる、いふかひなくねたし。(枕草子「ねたきもの」段)

③鋤・鉄ナド持タル下衆共、不知ズ出来テ、墓ヲ只築ニ築テ、其ノ上ニ卒都婆ヲ持來テ起ツ。

(今昔物語 卷第二七第三六 ④五二八①)

いずれも、対象物の変化や、その対象物に変化をもたらす主体の動きの一連のプロセスが遅滞なく進んで完了・完結に至る様子を、嘆きや驚きをこめて強調的に表しているものと言える。

問題の箇所「只局に局たて、」の場合、次節で論じるように「局たて」をどう品詞分解するかに議論はあるものの、「局たて」が局を設置する動作を表すことは確かと見てよいと思う。従って「只局に局たて、」とは、局が出来上がるまでの変化やそれを設置する動作の開始から完結に至るプロセスが、遅滞・中断なく進む様子を、感嘆をこめて強調的に表したものであることになる。

結局この問題に関しては「たちまち局に仕切つて立てて」(全講)「どんどん片っぱしから仕切つていつて」「テキパキと連続した『つばねる』動作を描写したもの」(解環)といった訳を支持する形になる。

なお日本古典全書の頭注は「すぐ局にし切りをこしらえて」としているが、局の中にさらにし切りを作るといふのがどういふことで、この場合どういう必要性があるのか理解しにくい。これは「改良に改良して(を重ねて)」「念には念を入れて」といった表現(恐らく特に現代の)から類推して、「局の中に局を作つて」の意に解した結果かと思うが、それよりは右のように「タダ——ニ

「」の類の意味から帰納される解釈を優先する方がよいと考える。

なお前田本では問題の箇所が「かた時のほどに、つばねにつばねたて、」となっている。<sup>2)</sup>「つばねにつばねたて、」であれば、「くひにくふ」のような、「タダ」を冠しない「動詞二十動詞」（拙稿<sup>1)</sup>で言う「φ型」の一種ということになるであろうが、この型の場合、動詞が対象変化の他動詞であると、対象の変化の結果が著しいことを強調的に表現することになるようである。例えば

④油ニ油シタル紙ヲ以テ裹タリ。

（今昔物語 卷二十第四六 ④二一六<sup>17)</sup>）

の「油ニ油シタル」は、「油をしみこませる」の意の漢語サ変複合動詞「油ス」が、「くひにくふ」のような形をとったものと見るが、「（水を通さないように）油をよくしみこませた」の意に解釈される。

「つばねにつばねたて、」にそれを当てはめると、「局を入念にしたらえて・立派に作って」といった意味になりそうだが、この「局」とは枕草子の本文にもあるように、畳を敷いて屏風を立てた仮の間仕切り程度の簡略な作りのものと思われ、入念にしたらえるとか立派に作るというようなことにはなじみにくそうである。<sup>3)</sup>「つばねにつばねたて、」のもう一つの解釈の可能性として「局の中に局をつくって」というものもありそうだが、これには前述の日本古典全書の「局にし切りをこしらえて」という訳と同様の問題がある。

三 「只局に」の構成

三―1 「局たて」の品詞分解

次に、Cの問題点について考える。これについては

c 「局たて」の部分はどう品詞分解するか。

c' 「只局に局たて、」が、「只局たてに局たて、」または「只たてに局たて、」局只たてにたて、」という形ではないことをどう見るか。

の二点が問題になって来よう。

c については「名詞『つばね』+動詞『たつ』と見る説と、「動詞『つばね』+強意の補助動詞『たつ』と見る説（解環、集成）とがある。後者に従った場合、動詞「つばね」や「ひきつばね」の例はあり、この場面によく当てはまる。

⑤御もののけ、をのをの屏風をつばねつ、験者ども、あづかりく／＼に加持しのしり叫びあひたり。

（栄花物語 卷八 上二六一<sup>9)</sup>）

⑥里の残の人／＼は参りて（中略）はかなく屏風・几帳ばかりをひきつばねて、ひまもなく居たり。

（栄花物語 卷二四 下一七四<sup>①)</sup>）

一方補助動詞「たつ」は、『小学館古語大辞典』に「顯示、反復、十分の意を添える」とあり、何らかの対象物を加工・設置する動作を表す動詞に「たつ」が下接した場合、次の⑤⑥の例のように「入念に・著しく、加工する・設置する」といった意味になるように思われる。

⑦いかでかは女のつくろひたてたる（化粧を凝らした）の意

顔の色あひには似たらむ。（源氏物語 行幸 九〇六<sup>⑫)</sup>）

⑧いみじうしたてて（立派に支度をして）の意 婿取りたるに、ほどもなく住まぬ婿の舅にあひたる、

（枕草子 二五三段「いみじうしたてて」段<sup>①)</sup>）

この他に、枕草子では「装束きたつ・つくろひたつ」などが、

源氏物語でも「したつ・つくろひたつ・なでつくろひたつ」などがあるが、いずれも「入念に・著しく、加工する・設置する」意味に取られる。「局たて」の「たて」がこのような「したつ」と同じものだとすると、「つばねたつ」は「入念に局をつくる・立派に局をつくる」といった意味になることが想像される。しかし、参籠の際の「局」に入念につくるとか、立派につくるということがそぐわないのは、前節で述べた通りであり、その点疑問が残る。

一方、「名詞『つばね』+動詞『たつ』」だとすると、「つばねたつ」自体は単に「局」を設置するというだけの意味になり、こちらは右記のような疑問を生じずにすむ。ただし、本格的な建築物の建設に「たつ」を用いた例は多いが、「局」を「たつ」とした例が見当たらず、この点は弱点と言える。もっとも屏風や几帳について「たつ」を用いた例は多いし、説教の高座のような仮設的なものを設置することに「たつ」を用いた例も

⑨ 仏の御前、高座左右にたてて礼盤たてさせ給へり。

(栄花物語 卷一六 下五〇⑪)

のようなものがある。ここから推すと局を設ける動作を表す「たつ」があつたと想定したとしても大きな無理はないと思われ、筆者は現時点ではこちらの立場をとっておきたい。

もう一つ、先行諸説の中にはなく、またそのような実例も見当たらないが、「動詞『つばね』+動詞『たつ』」とする見方も可能性としてはあると思われる。しかし、ここでは実例として近いもののある「名詞『つばね』+動詞『たつ』」を優先しておきたい。

### 三—2 「——」線部が「局」であること

次にcの点であるがこれは、

「只局に局たて、」が「タダ——ニ——」の類であるならば、

「ただくひにくふ」のように、「——」線部と「——」部とが一致(活用形は異なるとしても)するか、そうでなければ動詞「たつ」の部分の方が「——」線部に来そうなものなのになうない。名詞「局」が「——」線部に位置し得るのか。

という疑問だと言ひ換えられるだろう。「局たて」を「動詞『つばね』+補助動詞『たつ』」とする解環の説も、そうすれば「——」線部を名詞とせずに、動詞連用形として捉えられるということが、根拠の一つになっているのではないかと思う。

④「タダ——ニ——」の型の場合、「——」線部は動詞連用形(の居体言)とは限らず、それ以外の体言的資格を有するものが位置し得る。

⑤「——」線部が複合的なもので音節数が多い場合、「——」線部はその一部であることがまあり得る。

の二点から、ここに「名詞『局』+動詞『たつ』」という動詞句の一部である名詞「局」が来ることもあり得るものと判断する。

⑥の点については、このような疑問が生じるのは、「——」線部が動詞で、「——」線部が動詞連用形という形が典型的で本来的な形という認識によるのであろうが、「——」線部は動詞連用形(これも居体言と見られるわけであるが)とは限らず、形容詞語幹・形容動詞語幹・漢語サ変動詞語幹である場合もある。

⑦風いたう吹き、海の面、たゞあしにあしうなるに……、船に浪のかけたるさまなど、かた時にさばかりなごかりつる海とも見えずかし。

(枕草子 二八六段「うちとくまじきもの」段⑦)  
⑧其ノ瓜、只大キニ大キニ成テ、皆微妙瓜ニ熟シタリ。

(今昔物語集 卷二八第四〇 ⑤二二二②)

## ⑫ コノ事ノ、タダ繁昌ニ世ニハンジャウシテ

(愚管抄 卷六 二九四⑧)

これら形容詞語幹・形容動詞語幹・漢語サ変動詞語幹は、体言的資格を有する点において共通している。

⑩の点については、「――」線部が複合動詞や動詞句などの複合的なものの場合、「――」線部はその複合動詞や動詞句の一部だけであることが多い。特に「――」線部が五音節以上の複合動詞・動詞句である場合には全ての例がそうであり、「――」線部が四音節の複合動詞の場合も原則としてそうである。「局たつ」は五音節であるから、「――」線部に来るのはその一部の筈であり、前掲cの「只局たてに局たて」という形をとらないという疑問は解決する。

次に問題になるのは、「――」線部に来るのが「――」線部の一部である場合、「――」線部のどの部分が来るかということである。ここで問題の例について推測するのに最も参考になりそうなのは、⑩の「ただあしにあしうなる」、⑪の「只大キニ大キニ成」の類である。これらの例の「――」線部「あしうなる」や「大キニ成テ」は、

「変化の結果」+「(主體または対象変化の)動詞」

という構成を有する点において、「局たつ」と類似性を持つと思われる。なお「変化の結果」とは、それによってできる物や生じる状態で、⑩の例の「あし(う)」⑪の「大キ(ニ)」や問題の①の例の「局」等がこれに当り、「(主體または対象変化の)動詞」とは⑩⑪の例の「なる」や問題の①の例の「たつ」である。⑩⑪の例や①の例では「――」線部の前半に当る「変化の結果」の部分が「――」線部に来て

【I】タダ+「変化の結果」+「――」+「変化の結果」+「動詞」  
という形をとっていることになる。

一方

## ⑬ たゞなりに花の都田舎になるこそ悲しけれ

(平家物語 卷五 都遷 上三三六⑤)

のような例もあり、これも「――」線部「田舎になる」が

「変化の結果」+「(主體または対象変化の)動詞」

という構成を有しているが、「――」線部に来ているのは「――」線部の後半部に当る「(主體または対象変化の)動詞」の「ナル(ナリ)」であって、

【II】タダ+「動詞」+「――」+「変化の結果」+「動詞」  
という形になっている。また

⑭ (道隆の) 北方の一つ腹のは、さへき国々の守どもにたゞな

しになさせ給へり。(栄花物語 卷第三 上一二四⑤)

⑮ 我身もすゑ(晩年)に、たゞなりになる心地せしかば

(夜の寝覚 卷五 三五⑬)

⑯ 着物ナドモ見苦ク只成リニ成持行ケバ

(今昔物語集 卷三〇第四 一二〇⑬)

等の例は、「さへき国々の守ども(に)・すゑ(に)・見苦(ク)」といった「変化の結果」に当るもの(――線部)が「タダ」よりも前に位置して

【III】「変化の結果」+タダ+「動詞」+「――」+「動詞」

という形になっているが、「――」線部に動詞「なす・なる(なし・なり)」が来ている点では、【II】と同一とも考えられる。

では、【I】のパターンをとっている⑩や①のような例と、【II】のパターンをとっている⑬・⑮の例の間にはどのような違いがあるだろうか。この点が明らかになれば、問題の例が「ただ局に局たて」という【I】のパターンの形をとっている、【II】のパターンである「\*ただたてに局たて」や「\*局ただたてにたて」という形になっていないことの答えも得られる筈

である。

⑩⑪のように「Ⅰ」のパターンをとるのは、実際に変化が完結・完成し、最終的な結果にまで到達した場合のようである。例えば⑩では海の様子が「悪し」くなり、その最終的な結果として大嵐となるに至っているし、⑪の例では、瓜が食べられるまでに（ということとは多分これ以上大きくなることはないほどに）成長したというのである。そして、⑩⑪とも「変化の結果」として生じた事態を中心に次の場面が展開していつている。この種のものは⑩⑪以外にもある程度の数の例があるが、いずれも同様のことが言えそうである。結局これら「Ⅰ」のパターンのものにおいては、第二節で述べたような意味を基本としつつ、「変化の結果」の方にもある程度意味上の重点がある、ということになるのではないだろうか。

一方、⑬⑭のように、「Ⅱ」「Ⅲ」のパターンをとる例においては、変化は進んだとしても、必ずしも最終的な「変化の結果」には到達していなかったり、「変化の結果」として生じた事態を中心に次の場面が展開していなかったりする。

⑬は、福原遷都に伴う京都の荒廃を描いた場面、確かに京都は荒廃するのだが、この約半年後に都帰りするので、完全に荒廃しきったというわけでもなさそうである。またこの後「変化の結果」である荒廃した旧都を中心に次の場面が展開してはおらず、歌二首が掲げられているのみで、後は福原の新都に話題が移っている。⑭は摂政道隆が外戚を登用したということで、「さべき国々の守」にすることは完結しているであろうが、その登用された人々を中心に次の場面が展開してはいない。⑮は寢覚の上の父入道が、自らの死が近いことを自覚して寢覚の上を入内させなかった過去のことを回想している場面だが、実際には父入道は死ななかつたわけである。⑯は中務太輔の死後、その娘の婿である兵衛

佐が困窮していく様子の描写であるが、「見苦し」きの局限にまで達したというわけでもないようで、むしろそうなる前に別れようということのように読み取れる。

結局⑩⑪の例のように

「Ⅰ」タダ＋「変化の結果」＋「Ⅱ」＋「変化の結果」＋「動詞」  
という形をとるのは、意味上「変化の結果」の方にもある程度の重点がある場合であり、⑬⑭のように

「Ⅱ」タダ＋「動詞」＋「Ⅲ」＋「変化の結果」＋「動詞」  
「Ⅲ」「変化の結果」＋「Ⅱ」＋「変化の結果」＋「動詞」  
という形をとるものは、「変化の結果」にあまり重点がない場合、

ということになる。「Ⅰ」と「Ⅱ」に関しては、「――」線部のうち、意味上ある程度重点のある部分が「――」線部にくる、ということとも言えそうである。

問題の例に戻ると、「局」はこの場面で完成し、変化の最終的な結果に到達するに至っている。またこの後その局のあたりの描写が少し続いてもいる。「只局」は、前述のように局ができるまでのプロセスが遅滞・中断なく進む様子を描くことに主眼のある表現と考えられるが、それに加えてたちまちのうちに「局」ができる目の前にある、という「変化の結果」への驚嘆をこめた表現としての性格も有するものと思われる。即ち、「変化の結果」にある程度の重点があるわけで、そこから推せば、⑩⑪同様に「Ⅰ」のパターンで「ただ局に局たて、」という形になるのが自然ということになる。

となると、cのもう一つの疑問点である、問題の例が「Ⅱ」や「Ⅲ」のパターン「\*只たてに局たてて」「\*局只たてにたてて」ではないという疑問にも一応の答えが得られたことになる。

#### 四 本文異同の検討

前節までの論述を踏まえつつ、ここで他の諸本の本文について検討してみる。まず、能因本の「たゞつばねにいで、」はどういう状況であるのかも一つはつきりしない。全注釈では「すぐ局に出て、（局を仕切るために）格子に簾をさらさらとかける様子は」としているが、すると「局」は既に設定されていてそこに更に仕切りを設けたことになり、これは前述のようにどういう必要性的ある行為なのか理解しにくい。

前田本の「つばねにつばねたて、」は、解釈において第二節で述べたような問題があり、前田本の本文の一般的評価の低さとも相まって、採りにくい。

堺本の「たゞつばねにたて、」は、三卷本一類の「只局に局たて、」が重複形をとっていないようなもので、

①⑦風はたゞはやになるまゝに（落窪物語 卷一 四九⑭）

といった類例もあり、これだけでも動きや変化のプロセスが滞りなく進むことは表し得るようであるが、重複形になっていない分、切迫感や、感嘆をこめた強調的表現という性格は稀薄で、その後の「いみじうしつきたり」という評価の語がやや浮いたものに感じられる。

三卷本二類本の「つばねにたて、」も、一応このままでも解釈可能であるが、やはり重複形になっていない分、感嘆をこめた強調的表現という性格は稀薄である。また「タダ」を伴わない「つばねにたて、」という表現からは、局をてきぱきと設置する動作や局がたちまちにできていくさまは読み取れず、その後の「いみじうしつきたり」が更に唐突に感じられる。なお既存の三卷本二類本は一類本を堺本によって校訂したものと言われているが、この箇所「つばねにたて、」は、重複形になっていない点では堺本の「たゞつばねにたて、」と類似する。

なお「タダ——二——」型は中古・院政期に最も盛んに用いられ、「ただあしにあしうなる」のような形もこの時期には見受けられるが、中世後期にはかなり衰えるようで、それ以後の時代においては、三卷本一類の本文が難解であったがために、他の本では次々に本文の改変を生じた（解環の見解）ということもあり得たであろう。

結局、三卷本一類の本文「只局に局たて、」は、解釈面からはこの場面に最もよく適合すると思われ、第三節で述べたように語法面からも一応説明可能であり、この箇所については三卷本一類の本文を採るのが適切ではないかと考える次第である。

#### （注）

（1） 関谷浩「ただあきに」の構成について——「ただ」は、はたして副詞か——（国学院大『国語研究』三一 一九七二）。関谷隆純「ただ——に——」（『解釈』二七—二二 一九八二）もアクセント以外の主要な論拠を整理して呈示している。

（2） 『前田本枕冊子新註』ではこの部分を「ほんのしばらくの間にしきりをつけて局をつくり」と訳しているが、「ほんのしばらくの間に」は、前田本でこの前にある「片時のほどに」に対応する訳とも取られ、「つばねにつばねたて、」自体をどう把握しているかはよくわからない。

（3） 成立の時代はかなり下るが、石山寺縁起の藤原国能の妻の参籠の図に、寺社に参籠した際の局の様子が描かれており、それも畳二枚を敷いて屏風を立てまわした程度のものである（この点是小林一彦氏「洗足学園魚津短期大学」の御教示による）。

（4） 山口康子「同一動詞反復形式の通史的考察——」に「を介する形式の変転——」（『長崎大学教育学部人文科学研究報告』二七一—九七八）では、「V型」「派生型」としてこの種のものを挙げている（ただし④のように「タダ」を冠しないものも含まれている）。

る。

- (5) 注釈書によっては「日のいとうらかなるに」に始まる段として扱われている。なお能因本では該当箇所が「たゞあしになる」となっている。

- (6) 「x——ニ——」の類(xは「タダ」である場合もそれ以外である場合もある)において、「——」線部が複合的なもの、「——」線部がその一部であるとき、「——」線部の前半部・後半部のいずれが「——」線部に来るかについては、拙稿(二)で論じたことがある。議論は全体としては整理不十分なものになってしまい、再整理の必要を感じている。ただ、例えば「ただ入りに入り来」と「ただ来に入り来」とでは、前者は「入り」に、後者は「来」により意味上重点があるといった差異が認められる場合があった。これは「——」線部のうち、意味上より重点のある部分が「——」線部にくるということであるから、ここでの結論と軌を一にするとと言える。

- (7) とはいえ、第二節で前田本の本文「つばねにつばねたて、」に對して「局を入念にしつらえて・立派に作って」といった「変化の結果」が中心の意味が想定されたのとは違って、あくまで「局たて」の動作・変化の過程を表すのが基本であり、「変化の結果」にはある程度の重点があるという程度と考える。

- (8) 楠道隆「枕草子三卷本兩類本考」(『枕草子異本研究』笠間書院一九七〇)

#### 〈引用資料〉

枕草子(『校本枕冊子』により三卷本一類の本文を採る) 落窪物語・栄花物語・夜の寝覚・今昔物語集・愚管抄(以上日本古典文学大系) 源氏物語(『源氏物語大成』) なお枕草子の用例は該当の語句の存在する段・行数を記し、他の資料の用例はページ数・行数を記した。